

# 「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクト ラウンドテーブル

## 利活用 WG 議事要旨

- 1 日時 平成 25 年 2 月 26 日（火） 16：00～18：00
- 2 場所 三菱総合研究所 会議室(大会議室 A)
- 3 出席者（敬称略）：
  - (1) 構成員  
松崎構成員（座長）、天野構成員、稲垣構成員、及川構成員、川内構成員、関谷構成員、田中構成員、福島構成員、藤沢構成員、山口構成員
  - (2) 運用実証・ポータル開発事業者  
青木部長（凸版印刷）、岩田課長代理（NTT データ）
  - (3) オブザーバ
    - ① 総務省  
白石課長補佐
    - ② 国立国会図書館  
大場電子情報流通課長
  - (4) 三菱総合研究所  
前田、松尾
- 4 議事内容
  - (ア) ガイドライン案について
  - (イ) その他
    - 第 2 回利活用 WG 議事要旨（確定版）について
    - 今後の予定
- 5 議事

### 【議題 1：ガイドライン案について】

- 事務局より、資料①-01「構築・運用のためのガイドライン」を説明。
- 事務局より、資料①-02「震災関連アーカイブ運用ポリシー比較」を説明。
- 事務局より、資料①-03「被災資料の応急措置、修復、保存について【基礎編】」、資料①-04「被災資料の応急措置、修復、保存について【事例編】」、資料①-05「震災関連情報のデジタルデータ化について【基礎編】」、資料①-06「震災関連情報のデジタルデータ化について【事例編】」、資料①-07「デジタルデータの長期保存・利用のために【基礎編】」、資料①-08「デジタルデータの長期保存・利用のために【事例編】」を説明。
- なお、全体構成として技術WGでは「基礎編」と「事例編」は、各章ごとに記載するのではなく「基礎編」と「事例編」でそれぞれまとまっている方がいいという意見があったことを報告。

主な意見は以下の通り。

- 構成員（松崎座長）  
ガイドラインを利用する側、資料を提供する側、アーカイブを活用する側の 3 つの視点を持ってガイドラインを確認することが必要と思われる。その視点で意見を伺いたい。

- 構成員（福島構成員）
 

資料①-03 について、文化財レスキューで修復作業を実施した時の経験から、資料が少数で貴重なものならこのやり方でよいが、大量で応急的に処理を実施するものは、このやり方では現場作業がもたない。

フローチャートのようなもので状況により振り分けがあり、それぞれの方法を選べるような書き方にするとよい。
- 構成員（川内構成員）
 

一般の人が、これを見てやるのは不可能だと感じた。スクウェルチドライ法も実際やってみると、匂いを除去するには良い方法であるが、かなり手間と時間がかかる。一般の人がやって簡単な方法が示されているとよい。例えば、先ほどお話のあったフローチャートのような直観的に分かるものがよい。

歴史資料ネットの資料の中に、「修復方法」という形で、ホームページで公開している資料がある。こちらを参照いただき、ご検討いただければと思う。ガイドラインに引用していただく分にはかまわない。
- 事務局（松尾）
 

あとで、個別に URL をご紹介いただきたい。
- 構成員（田中構成員）
 

これはきちんと保存するための方法。一般の人には難し過ぎる。最低限やればよいことが書かれていればよいのではないか。Q&A のような形式でガイダンスがあるとよい。例えば、「匂いを取りたい」を選択するとそこが参照できるなど。
- 事務局（松尾）
 

技術 WG でも詳細に書き過ぎているというご意見をいただいた。大量な場合はこう、貴重なものはこう、等、この場合は、こうするという一覧を最初につけるやり方もあるのではないかと考えている。
- 構成員（及川構成員）
 

ガイドラインは、ある程度硬いものであって、網羅的なものになっても仕方ない。Web で公開するのであれば、質問形式で、Yes/No を選択していくと、その人が最低限やればよいステップにたどり着くというような形で提供できるのではないか。そのような工夫をする時間的、予算的な余裕があるかという問題だと思うが。

難しいということであれば、必要な部分はここここだけというものが分かるガイダンスがあれば良いと思う。
- 構成員（松崎座長）
 

ガイドラインは、アーカイブに資料を寄贈したり自らアーカイブを構築したりする等のモチベーションを高めるものでないといけない。
- 構成員（藤沢構成員）
 

アーカイブにチャレンジしたい団体が利用することを考えると、是非、使えるものを作成してほしいと感じる。初心者が見てわかるものが良いと考える。また、インデックスを見て知識を深めていけると良い。本の索引のイメージ。

基礎編と事例編は、関連付いているので、事例編だけ並べても分かりにくいと思われるが、章立てを工夫すれば、一緒になっても良いのではないかとと思う。
- 構成員（松崎座長）
 

PDF での配布となるのか。
- 総務省（白石補佐）
 

総務省のホームページ上での公開を考えているので、PDF での掲載となる予定である。
- 構成員（福島構成員）
 

自分で辿っていけるものが良い。PDF での提供となると、そもそもガイドラインの利

用を躊躇する人もいるのではないか。

- 構成員（及川構成員）

Web形式にすると、アクセス数が集計でき、どのページが最も見られているかが分かりガイドラインの改定に役立てられるという利点もある。
- 総務省（白石補佐）

総務省のホームページでの管理は難しいが、公開方法については工夫したい。
- 構成員（松崎座長）

利用者側からすると、幅広い活用事例が載っている方が分かりやすいと思われる。
- 構成員（及川構成員）

資料①-04について、掲載する事例は、今後増えていくのか。
- 事務局（松尾）

こういう観点で増やした方が良いというご意見があれば、追加したい。
- 構成員（川内構成員）

資料①-04は、文化財レスキューの目録作成の事例と思われるが、本来、このガイドラインでは、応急措置、修復、保存の一連のプロセスを掲載すべきである。目録作成は、保存の一部の処理である。ガイドラインとしては、流れを踏まえた上で、プロセス全体の事例を書く等、整理が必要なのではないか。
- 事務局（松尾）

資料①-04については、運用実証の事例がなく、他のガイドラインとは少し違う。もし、適当な事例があれば、ご紹介いただき、それを掲載することも可能と思われる。
- 構成員（川内構成員）

応急措置、修復、保存のガイドラインでは、運用実証以外の部分を事例としてまとめていくことが前提だと思われるが、文化財レスキュー等、運用実証とは異なる事例を掲載することに対して、説明をした方がいいのではないか。
- 構成員（福島構成員）

岩手県陸前高田市で行っている行政資料の修復は、緊急雇用対策費を使って大量な資料のデジタル化を実施している。その事例を掲載してはどうか。総務課で話が聞けるはずである。文化庁の一年目の報告書にもその作業の一部が掲載されている。また、群馬県及び神奈川県の記事も参考になる。
- 構成員（川内構成員）

東北大にある宮城歴史資料保全ネットワークは、資料を洗浄し、デジタル化してホームページで公開されている。どちらにしてもプロセス全体と紹介する事例との対応関係の整理が必要である。
- 事務局より、資料①-09「震災関連情報のメタデータ利用について【基礎編】」、資料①-10「メタデータ利用ガイドライン推奨項目案」、資料①-11「震災関連情報のメタデータ利用について【事例編】」、資料①-12「(参考) 震災関連デジタルアーカイブ連携メタデータスキーマ」、資料①-13「(参考) NDL 東日本大震災アーカイブ震災メタデータスキーマ」を説明。

主な意見は以下の通り。

- 構成員（松崎座長）

こちらの資料についてのご意見はあるか。
- 構成員（稲垣構成員）

中越防災安全機構では、現地のことをよく知る人間がメタデータの登録を行った。今

あるものを特にどれということなく保存し、大事な部分から登録していこうという方針だった。地域での記録、復興、助け合い等、地域毎の時間軸ということにこだわっている。地名がキーワードとなっている。地名も地域で呼ばれている名前で登録した。

○ 構成員（田中構成員）

利用する人を考えると地域という視点が大事である。メタデータの正確性より、地域の人が地域のことを伝えることができるという点が大事だと思われる。

○ 構成員（関谷構成員）

関東大震災の資料でも、被害があった場所にはデータがたくさんある。避難していった人がどう生活したかや、救援、救助する側のデータは、あまり多く残っていない。震災の情報とは、被害の情報だけではないということを集める人に明確に伝えないと、後から考えて必要な情報が集まらずに捨てられてしまうことになりかねない。

○ 構成員（天野構成員）

県の歴史資料館が中心になって、アーカイブを作っているところがある。コンテンツが「ものがたり」になっているので、防災や教育など目的意識がある人も、目的意識のない人も、「ものがたり」を通じて「あれから10年経ったんだな」「そういうことがあったな」と思い出すことができる。主人公は人であり、立ち直っていく人のストーリーとして、詩が掲載されているなど、ものがたりを見た人により新たにいろいろなコンテンツが加わっていく。富岡町の機関誌があるので、ご紹介する。

○ 構成員（山口構成員）

体験談等の音声情報は、どのようなメタデータとなっているのか知りたい。

○ 事務局（松尾）

資料①-10から、「資料種別」に「音声」が入ることになる。「タイトル」にもそれに関するものを入れることができる。あとは、「キーワード」に体験談の中でもキーワードとなる文言を入れることができる。

○ NTT データ（岩田）

音声の内容を全てメタデータに登録することは困難なので、話の内容などは、ソーシャルタグを使って後から意味づけを追加できる仕組みを用意した。また、それを見たり聞いたりした一般の人の感想やコメントをタグ付けできるようにしくみも技術的には提供することになっている。ただし、タグを誰がどのように入力するかは、運用の課題でもある。今後、ソーシャルタグやコメント機能を使いながら付与されたタグやコメントの利用方法を広げていくことになると考えられる。

○ 構成員（山口構成員）

教育の現場では、現場の情報がほしいと思うことがある。例えば「ブロック塀」で検索し、地震が起こった時、「ブロック塀」の側にいた人がどのような行動をしたのか、実際の体験として、生徒に話すことができる。そのため、話の内容からキーワード検索し、そのコンテンツにたどり着けるとよい。

○ 構成員（田中構成員）

分類などは、使う人の意図によって変わってきてしまう。明確な分け方はかえって必要なコンテンツにたどりにくくしてしまうということもある。写真だったら、何を言いたかったのかという程度でよいのではないか。また、例えばボランティアに行った人のつぶやきなども重要なコンテンツである。これはいらぬ、とヘジテイトされないこと、10年、20年と集め続けることも大事。

○ 構成員（及川構成員）

アーカイブはカチッとしたデータベースであると同時に Web のフリーキーワード検索のような側面を持つものなのではないか。例えば、図書館であれば、書誌情報の入力をきちんとすると目的の本が見つかるという検索の仕方となるが、それを強要すると一

般の人は入力できなくなってしまうし、GoogleのようにキーワードひとつでいろいろなWeb上のコンテンツを検索できる方が使いやすいと感じることもあるだろう。その両方を持っているのができるとよい。想定している読者がこれを読んでメタデータスキーマを設計できるかということが重要である。本当にやろうとしたら、これだけでは完結できない。他のアーカイブサイトでは、これを使っているのか。作ったけれど、使われないということでは困る。

○ 事務局（松尾）

これだけでは、設計できないと思われる。使い方の話は、例えば東日本大震災アーカイブの使い方の説明などが必要になる。しかしガイドラインでは詳細を説明すると長くなるので、URLの提示のみとする方針である。

○ 構成員（及川構成員）

今回は、アーカイブを構築する人を対象としているとのことだが、独自にアーカイブを作ろうとしている人だけでなく、コンテンツをNDLのアーカイブに提供してNDLに移管してもらいたいという人もいる。前者に対しては、東日本大震災アーカイブと連携する場合には、ここを参照してほしいという情報が必要。

ところで、どのくらいの規模の団体が、アーカイブを構築すると想定しているのか。また、その団体がどのくらいコンテンツを持っていて、どのくらいの規模感でアーカイブを構築しようとしていると想定しているのか。読む人のスキルレベルをどのくらいに定めているのか。前提を決めておいた方が良いガイドラインとなるのではないか。

○ 構成員（田中構成員）

運用事業者は、NDLのアーカイブと連携するのみとなるのか、いずれはNDLに取り込まれることになるのか、どちらのケースが多いかにもよる。最終的にNDLに取り込もうというのであれば、連携できることを強く推奨すべきであり、デジタルアーカイブを根付かせようというのであれば、あまり縛りをかけないほうが良い。

○ NDL（大場課長）

NDLとしては、いろいろな団体に立ち上がってほしいと考えている。取り込む、ということではなく、一緒に連携していきたいと思っている。ただ、万が一倒れるところがあれば、フォローしたい。

○ 構成員（関谷構成員）

初心者にとっては、メタデータは、最低限これだけは入力する必要があるというものがあるとよい。優先順位が分からず、項目が羅列してあるので、これを読んで何をすればいいかが分からない。

○ 構成員（福島構成員）

多くの人に使ってもらうには、その話が肝となる。内容的には、すごく簡単なものにして、これだけやればできるという風を書くことが良い。ガイドラインのガイドラインみたいなものが示されており、誰でもできるものとなっていること。災害に限らずとも、地域アーカイブ構築も流用できるようなものが必要である。今後、ずっと流通していけるものを作る必要がある。

○ 総務省（白石補佐）

今のお話は、本編とは別に、多くてもせいぜい4から5枚くらいの要約版のようなものがあればいいというお話か。

○ 構成員（福島構成員）

そういうことである。「誰でもできるアーカイブ」というようなものである。

○ 構成員（田中構成員）

「〇〇したい」ということに答が見つかるようなものがよい。最低限参照しなければならないことが分かるものがほしい。

- 事務局より、資料①-14「震災関連アーカイブの権利関係について【基礎編】」、資料①-15「震災関連アーカイブの権利関係について【基礎編】参考資料3」、資料①-16「震災関連アーカイブの権利関係について【基礎編】参考資料4」、資料①-17「震災関連アーカイブの権利関係について【事例編】」を説明。

主な意見は以下の通り。

- 構成員（田中構成員）  
権利関係の処理についても、最低限配慮しなければならないことが分かるとよい。写っている対象が「人」の場合はダメで、「物」であればいいのか、「物」であっても誰の家か特定されるようなものはいけないのか。
- 事務局（松尾）  
「物」であっても看板等、業者が特定でき、かつ誹謗するようなものはいけないなど、配慮すべき点はある。
- 構成員（関谷構成員）  
100年後、200年後に使用する人のことも考えるべきである。国立国会図書館が作るものであれば、なおさらである。肖像権もあるが、その頃であれば公開できるものも増えると思われる。
- 構成員（松崎座長）  
関東大震災の時の資料のように、今は公開できないが、時間が経てば公開できるものもあるということを考えるべきである。
- 構成員（及川構成員）  
災害関連のアーカイブということで、それを最初にポリシーとして出してはいかがか。
- 構成員（稲垣構成員）  
コンテンツは漏れなく収集し、もしもの時のために権利関係もしっかりやっておく。現場では、全てをやるとうると難しい。システムで全てを行うのではなく、アーカイブを作るコーディネータ、活用するためのコーディネータ等、人が関わって広めていかなければならない。
- 構成員（松崎座長）  
今日のご意見をガイドラインに反映していただきたい。

#### 【議題2：その他】

- 事務局より、資料②「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクト ラウンドテーブル利活用WG 議事要旨」を説明。

主な意見は以下の通り。

- 事務局（前田）  
第2回利活用WG 議事要旨は公開資料とさせていただく。また、第4回利活用WGは3月19日10:30からの開催とさせていただく。

以上